
僕らの失恋日記

河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの失恋日記

【Zマーク】

Z8965M

【作者名】

河童

【あらすじ】

失恋を続ける見守る主人公が体験したちょっと怖くて、それを打ち消すほどの明るさがある日常を描いた変な物語

(前書き)

三分の一は「メティー」です。
カテゴリー詐欺注意

化け物? いるわけねー。それよりも今ある勉学の壁の方が怖い。
そう思いながら必死で勉学に励み、ギリギリで赤点を乗り越えた
高校一年生の夏。期末テストを間一髪で逃れた俺に待つていたのは
きらびやかな理想とつらい現実だった。

「何故俺たちには彼女がいないんだ」

「顔が悪いからだろ」

友人である木村に適切なつっこみをいれる。リア充核爆発しろ、
それが彼の口癖だ。俺もその考えは同意できる。だが、俺は脳内彼
女で満足しているからそんなこと言うほどのことでもない。

「そこで提案なんだが、今度プールにでも行かないか?」

「大体理由は分かるが、何でだ?」

「ナンパのために決まつてんだろ。今年の夏こそ成功させて彼女を
ゲットしようぜ!」

木村はご覧のとおりのダメ男である。中学に入つてなんだかんだ
で仲良くなつて今に至るわけだが、同じような台詞を今まで何度聞
いたことだろうか。成功していればいいのだが、いまだに『彼女い
ない』『年齢』を崩せないでいる。

「もういいよ。お前は頑張つたよ。だからもう伝説を更新するのは
やめとけ」

木村にはとある伝説がある。

伝説が始まつたのは中学校に入つて間もない頃だつた。

中学校の屋上は立ち入り禁止で誰もいないことをいいことに社交
性のない俺は屋上で飯を食つていた。すると木村が突然来て空を見
上げて言つた。

「俺、好きな子ができたんだ」

これが全ての元凶だった。それ以来彼は告白を続け見事に散つていった。

彼が惚れた女子は数え切れない。彼を愛した女子は一桁も行かない。泣いた喚いた叫んだ彼を俺は何度も見てきたが。彼の精神力は尋常ではなくフラれた次の日にはまたフラれていた。

ついでに木村は最初に好きになった女の子にその日の内に告白し、その日の内にフラれた。

彼につけられたあだ名は『フラレ王』

誰しもが蔑み忌み嫌う王として頂点に立っていた。

木村は実は顔が悪いわけではない。ただあまりにも告白の量が多く、浮氣者として悪名高いからフラれるのだ。本人はそれに気づいていないのが涙をそそる。

俺は教えないが。

「俺は今度こそやつてやるぞー！」

お前の噂は町内どころか、ネットで世界へ配信されているからもう無理だと思うんだけどな。まあ楽しければいいか。

「まあ頑張れ」

他人事なので他人事のように手を振つていると、木村はその手を掴んできた。

「何言つてんだ？お前も行くんだよ」

「はあ？」

「俺一人じゃ寂しいだろ？」

「知らねーよ。勝手に朽ち果てて逝け」

「相変わらず毒舌だねー。そんな冷たいこと言わないでさ、ちょっとしたバカンス気分で行こうよ」

しつこく誘つてくる木村に対し俺は断固として拒否していると、他のバカどもが集まってきた。

「なにに、ナンパしにいくの？」

「そういうことなら俺たちにまかせな。百戦錬磨の俺たちにかかればナンパすることなんて空氣を吸うようなものだ」

彼らは山田と斎藤、同じクラスのチャラくはないが真面目ではない、いたつて普通のダメな男子高校生だ。

「でもお前ら百戦慘敗じやねーか」

実はこの一人、木村に続くフラーれ回数を持つていて、サイトではフラー王の右腕と左腕と呼ばれていて、木村と同じ理由で成功していない。

百戦で培つた知識や経験も人の噂の力には勝てなかつたのだ。

「そんなことはどうでもいい。今度こそは成功させるぞー！」

「おー」

「んじゃ頑張つて。行つてらつしゃい」

俺が三人を見送ろうとすると、いつの間にか縄で拘束されており寮の外へと引きずりだされた。

数時間後

「俺と付き合つてくださいー！」
「いやです」
「僕と付き合つてください」
「拒否します」
「俺と付き合つてください」
「ごめんなさい」

俺は見事に三人が散つていいくのをプールの隅で眺めている。

予想はしていた。いや、この状況しか予想していなかつた。

だが、さすがにここまで散つていくと同情してしまつた。もうこのプールでコクつてない女性はいなんじやないか？

それからバラけたり一緒に行動をしたりと三人は作戦を変えているようだつた。だが、実は実らず……。

「おっ、戻つてきたか」

戻つてきたが、全員田が死んでいる。プールで遊んでいる女性全員がこちらを指差して笑つてゐるのが見える。今の彼らには拷問だらう。

「そろそろ引き上げるか？」

俺がそう言うと三人は力なく頷いた。いつものことだから気にしないが、今回はけつこうきてゐるようだ。

その夜は盛り上がつた。三人とも涙涙でジュースを飲みながら自分の情けなさに嘆いて今日の出来事を愚痴つた。正直言つてどうでもいい話だが。

「みんな死ねばいいのに。あるいは死にたい」

「何怖いこと言つてんだよ。フ卜れるなんていつものことだろ」

「簡単に言つなよ。これでも僕たちは必死でやつてるんだぞ」

涙声で山田が言つた。

見ていて必死さは伝わるんだが、次々に告白していくので説得力に欠けるのがこいつらの残念なところだ。

「ちくしょう、次こそは」

フ卜られた後の木村の口はいつもこの言葉を出す。

俺はこんなバカ野郎どもを見直している事が二つある。一つはこうして前向きに行く姿勢、二つ目は自分らをフ卜た女の悪口を決して言わないことだ。

「」の時を見てもつこ応援したくなつまひ。

次の日

「遊園地行こ」^{うえんち}」

結果 惨敗

数日後

「海に行こ」^{うみ}

結果 惨敗

十数日後

「キャンプに行こ」^{うんぷ}

結果 惨敗

ついにお盆の日までやつてきた。

夏休みも終盤に差し掛かり成果は絶望的な状況。

「もう、心が折れました」

「何を言つているんだ！俺たちはまだ生きている。望みを自ら絶つな！」

「僕は今まで一体何を……」

「寝るな、目を覚ませ！お前には見えないのか、成功という光が！」

「いや、いい意味で目覚めてるだろ」

「木村、あとは、任せた……」

「新藤おおののぶおおのおおのおおの。」

お盆のためほとんど帰省して静まつている寮で俺たちはちょっとした劇をやつているわけだが、これが案外つらいものがある。だつてフラれ続ける男たちの物語だよ？悲しすぎるだろ。

夏休みを遊ばず恋に全てを掲げた男たちの戦い。

『失恋戦記 ガイアの目覚め』近日制作予定

嘘の宣伝まで作りこなすらは一体何をやつていてるのだろうか。

そういえばまだ宿題終わってないな。

「バカ野郎！このままでそんなことやれるか！俺たちはまだ戦いそぞそぞ夏休みの宿題を始めたばかりじゃないのか！」

！そうだ、最後の切り札が残っているんだ！」

「俺は二、三の『かう最後の切札』という言葉を三十六回聞いた。」
「その最後の切り札でのには何だ?」

とがある。

「お前はつり橋効果というのを聞いたことがあるか?」「う前の口がら——三回聞く——ござる

簡単な説明

危機的状況なのに愛が芽生える」ことをつり橋効果といつ。（適当）

「今日はちゃんとした作戦だ。」そこから電車で一時間、徒歩で三十分のところに有名な心霊スポットがあるんだ。そこへ行つて女の子を怖がらせて男を見せよつて作戦だ。つまり、肝試しをやるぞ！」

明らかに無理があるな。

「「そりゃいいアイディアだ！」」

目の前が真っ暗な奴はどんなに小さい光だろうと頼りのつと近づいていく。たとえそれが地獄の業火だとしても。

「飛んで火にいる夏の虫つてこんな心境なのかねー」

俺はただ盛り上がる三人を遠めで見てるだけだ。
まつたくバカな奴らだ。

「お前らつり橋効果に誘える女の子いるのか?」

「当たり前だ。だてに何度もフラれてたわけではない。メルアドく
らい教えてくれた娘もいたさ」

「ほー意外だな」

「じゃあ全員最低一人は連れてこいよ」

「それって俺も入っているのか?」

「もちろん」

「ですよねー。」

肝試し当日

俺たちは心霊スポットらしきトンネルに来ている。

「で、これはどういうことだ?」

俺は小学校からの幼馴染である鈴木咲を連れてきた。オカルト好きなため肝試しやると言つたら快く来てくれた。

これでここに集まつたのは俺、木村、斎藤、咲の五人。予定してた
人数と違うような気がするな。

「おい、最低一人連れてくるつて言つたのは誰だ」

俺がドスのきいた声で言つと三人は汗を流しながらきょどる。

「これには訳があつて」

「ほら、みんなお盆で帰つてるし」

「すみませんでした」

三人とも田が泳いでいる。ここまできると怒りより哀れさが優先されるな。

「まあいい。じゃあ早速肝試しをするわけだが、どうするんだ？」

「それは決めているよ。百物語をするんだ」

「「「百物語？」」「」」

四人の声が重なる。

「おいおい、怖い話なんて何も知らないぞ」

咲が知らないのは仕方ないとして、四人全員が何をやるのか知らないなんて逆に驚きだ。

「大丈夫。そんなこともあるうかと実家の爺ちゃんの部屋から去年こんな本を持ち出してきているから」

そういうて見せてきたのは古い書物だった。タイトルに『恐』とあるので怖い話には間違いなさそうだ。

「何でトンネルで怖い話しなきやいけないんだ？」

俺がそう言つていううちに木村たちは咲に告白を始めよつとしていた。

「俺の話を聞けー！」

三人に鉄槌を加え、話を進める。

「ロウソクはめんどくさいから無しで、トンネルの中間地点でやることにします。心霊スポットだし、ひとつひとつをやれば何か出るだろうと思いまして」

こうして斬新な百物語が始まつた。

「最初誰話す？」

「じゃあ俺が」

俺は一番最初に手を上げた。こうこうのは最初の出だしが肝心だ。

「本は使う？」

「いや、いい。話すことは決まつてはいるから」

俺はそう言い、頭で話を整理した。

『これは知り合いから聞いた話なんだけどさ』

場が静かになり本当に怖い話をしているんだなという実感がわく。

『Aとしましようか。Aさんはある日見も知らない男子生徒に告白されて慌てて考えさせてくださいつて言つちやつたらしいんだ。その夜ずっとそのことを考えていてね、ついに了承しようと思つたんだって。だけどその男子生徒はその日学校に来てなくてね、ちょっと残念だった。

で、その日は部活があつて帰るのが遅くなつたらしいんだよ。薄暗い道を怯えながら帰つていると、公園から声がしたんだって。こんな夜に誰かいるの?と疑問に思つて覗いてみると、

今日は来てなかつた男子生徒が小学生に告白してたんだつてさ』

全員頭に『?』が浮かぶ。そりやそつだ怖いのは最後だからな。

「木村、お前口つくな?」
俺のその質問で静かな空間が全て凍りついた。誰かが「こわ……」ともうす。

「えつ、何で今それ言つ?何で今それ言つた?」

「俺、怖い話つてこれしか知らなくてね

「ちげーから!百物語でそういう怖さもとめてないから!」
必死で叫ぶ木村を他の三人は軽蔑の目線を送つていた。

「じゃあ次は誰？」

俺がきくと木村が静かに手を上げた。

「ふふ、この本の怖さを見せてやるよ」

木村はおもむろにその本を開いた。そしてそのまま固まつた。

「どうしたんだ？」

俺が恐る恐る本の中身を見てみると、文章が全て達筆な文字で書かれていた。

「……まさかこれ読めないのか？」

その言葉に反応したのか木村の身体がビクンッと跳ね上がる。せうだ、このつに鉄槌を下せり。

「」

「」

「次何やるの？まだかここまで来てまたか止めるの？」

咲が強気で言つ。オカルト好きな彼女にとつて百物語を中断したのはよほどかんさわつたのだろう。

俺を含めた四人を氣まずさを感じ、斎藤が苦し紛れに紙とペンを取り出して言つた。

「」

「」

「」

少し強気に「」を呼び出すと、十円玉は真ん中の社のま

うへ動いた。

「来るのは思わなかつた」

咲が少しうれしそうに言つ。

「誰から質問する？」

「じゃあ俺」

今度は木村が最初に手をあげた。

「いっくつさん いっくりさん 僕にいつか彼女ができますか？」

「いつに恥つてものはないのか？」

そう思つてみると。十円玉は勝手に動き出した。

『む・り』

「無理？いいえじゃなく無理！？」

木村の目が点になる。希望を完全否定された木村にはもう魂は残つていないうつだ。

その後斎藤と山田も同じ質問をして『む・り』と応えられた。

「こんなもんやつてられつかー！」

俺が質問をしようとすると、木村が突然叫びながら十円玉から手を離した。

「お前何やつてんだ！？」

「つむせー。どうせお前が動かしてるんだろー！」

どうやら今までのストレスが一気に爆発したらしかった。

「ー？」

木村のサプライズで驚いたのはもちろんだが、四人は別のことでの声を失つた。

「木村、絶対に後ろを向くなよ

俺は怒る木村に静かにそう言つ。

木村の後ろに、いるはずもない六人目の影があるのだ。その影は

木村の影の首を絞めるように重なつている。

「何なんだ？」

木村は愚かにも後ろを向いて立つとすると、その影は次第に実体化していった。

「これは……」

木村が完全に後ろを向いた時には、影は幼い少女に変わり、木村の首を絞めている状態になっていた。

「ひつ！」

全員が小さな悲鳴を上げる。

だが、そんな状況にも木村は冷静な顔をして少女を見つめている。

「き、木村？」

俺は驚いた。木村が少女を抱きしめているのだ。そして優しく語り掛ける。

「怖かったのか？さびしかったのか？だがもういい。俺が全部許そう。全部補おう。好きだ、付き合ひてくれ」

木村の言つている意味がよく分からぬ。少女も動搖して首から手が離れる。

「俺が口リコンかときいたな。あえて言わせてもらおう、俺は口リコンだと」

絶句した。こんな状況でこいつは何を言つてゐるんだ？

「ここでお別れだ諸君。早く行け！」

木村がそう言つたのと同時に俺たちは走り始めた。もう何がなんだか分からぬ。だが感じたのだ。恐ろしい恐怖を。

後ろからまるで闇が襲つてくるように感じる。木村の姿はもう見えない。代わりに無数の腕が伸びていた。

「に……がさ……ない」

突如前に一人の髪の長い女性が現れた。明らかに怨霊だ。

「くっ、ここまでか！」

俺が足を止めようとすると、山田と斎藤が「ヒヤッホーイ」と奇声を上げて一人の怨霊に飛び掛る。

「さあここは任せていくんだ！足を止めるなー！」

「絶対に振り向かないで走れ！俺たちは最後の告白をするーもう怨霊だつてかまわない！」

もういやだこいつらー

俺は友との別れを交わし、走り続けた。後ろからはもう木村達の声は聞こえない。

ちくしょう、何だつてこんな場所でこいつらやんや百物語なんてやつたんだ！

「生きてるか？相棒」

「ああ、もうダメっぽいがな」

「今振り返ると楽しかったな。彼女できなかつたけど」

「ああ、楽しかった。彼女できなかつたけど」

「それにしても木村はすごかつたよな。まさか幽霊に告白するとほ

「あれはすごかつた。俺たちも真似してみるか？」

「いいね。どうせ最後だし成功させるぞ」

「おうー！」

しばらく走り続けて俺たちは外へ出た。

もう朝を迎えていて日が目に染みる。後ろを向くと普通のトンネ

ルが口を開けているだけだった。

「何だつたんだ？全部夢か？」

夢であつてほしかつた。だが、ここに木村達の姿はなかつた。

「変な人たちだつたわね」

咲がそう呟く。

「ああ、変態だつた。だけどさ、いい友達だつたよ」

俺は涙がこみ上げてきた。あんな奴らでも、俺の青春のほとんど

の記憶に残つているんだ。楽しい思い出がいっぱいだつたんだ。

泣いていると、一枚の紙が落ちてきた。

それはトンネル前で記念に撮つた写真だつた。まだ現像してない
のにまるで今印刷したような暖かさがある。

写真には最初にいた俺たち五人の他に、木村の横で笑顔でいる少
女と山田と斎藤に挟まるように髪の長い美人な一人の女性が笑つ
てこちらを見ていた。

裏にはこう書かれていた。

『彼女できたぜ！』

(後書き)

怖かったですか？面白かったですか？
楽しんで暴走して書いた結果がこれです。
楽しんで読んでいただけたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8965m/>

僕らの失恋日記

2010年10月8日11時44分発行